

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2018年度 共同研究成果報告書〔研究費配分型〕

2019年5月16日 提出

1. 研究課題名	
博物館学芸員課程履修者への資料デジタル化教育に関する研究 (英文標記: Establishing a cultural property digitization program for future museum curators.)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)むらた たかし	所属機関・職名
村田 隆志	大阪国際大学国際教養学部・准教授
3. 研究分担者 (合計: 名) ※アート・リサーチセンター所属者は、「ARC 所属教員欄」に○印を付してください	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
前崎信也	京都女子大学家政学部・准教授 立命館大学アート・リサーチセンター客員協力研究員
桂まに子	京都女子大学図書館司書課程講師
池田方彩	天門美術館 館長
南出みゆき	天門美術館特任研究員、関西大学非常勤講師
今木正和	天門美術館特任研究員、篆刻家
谷岡彩	天門美術館特任研究員 大阪大学大学院文学研究科美術史学専攻博士前期課程

4. 研究課題の概要(300字程度) (申請書から変更がある場合は、変更点が分かるように明記してください)
<p>国内の美術館・博物館においても欧米と同様に所蔵資料のデジタル化や画像データベースを公開することが一般的になって久しい。しかしそこで働く人材を養成するための大学での学芸員課程では、デジタル化の技術や手法について学ぶことのできる機会は極めて限られているのが現状である。本研究では京都女子大学の博物館学芸員課程を履修する学生を対象に、絵画・歴史資料のデジタル化及び画像データベース構築に関する効果的な教育手法について研究を行った。なお、当初は成果を活用しての昨年度中の展覧会開催を予定していたが、甲斐虎山についての作品集約、撮影に時間を要したことから、2019年秋に枚方市の天門美術館にて開催することが決定している。</p>
5. 研究成果の概要 (この項は、本センターのホームページ・紀要等で公開することがあります)
<p>甲斐虎山は、従来全くと言ってよいほど美術史研究者の興味関心を惹いていなかった画家であり、生前・没後を通じて専論はいまだ存在しない状況にある。そのため、作品情報の蓄積もほとんど行われてはおらず、画業の全貌を把握することはおろか、どのような芸術を残していたのかさえ、部分的にしか知ることのできなかつた画家であった。</p>

(様式)

このような状況を鑑みれば、今回、京都女子学園所蔵、および個人蔵作品を集め、高精細なデジタルデータとしてその作品情報を蓄積できたことは、大きな一歩であったと位置づけられる。京都女子大学の博物館学芸員課程で学ぶ学生たちも、作品の取り扱いや、デジタルデータの活用の方法、細部を拡大し、肉眼では看取し難いほどの精緻な描写を視認しながらの作品解説執筆を行えたことは、極めて先駆的な教育的工夫であり、研究史上においても意義深い機会であったと位置づけられる。